



TITLE:

国立大学図書館協議会賞を受賞 廣庭基介氏の「京大『大惣本』購入事情の考案」

AUTHOR(S):

CITATION:

国立大学図書館協議会賞を受賞 廣庭基介氏の「京大『大惣本』購入事情の考案」. 静脩 1985, 22(1): 5-5

ISSUE DATE:

1985-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36949>

RIGHT:

## 国立大学図書館協議会賞を受賞

### 廣庭基介氏の「京大『大惣本』購入事情の考察」

「大学図書館研究」24号（1984年5月）に掲載された広庭基介氏（附属図書館閲覧掛長）の論文に第20回（昭和60年度）国立大学図書館協議会賞が与えられた。

「大惣本」とは江戸中期から明治中期にかけて、名古屋で営業をつづけた貸本屋大野屋惣八店（略して大惣）の旧蔵本をいう。一般の貸本屋が絵草子や読本など比較的軽くやわらかい内容の冊子類をおもに扱ったのにたいして、大惣のそれは仏書、神道書から儒学、心学、医学、本草、天文、暦学、歴史、地誌、茶道、文学にいたる広範な主題を含んでいたのが大きな特徴であるとされている。もちろん、その中心は浮世草子であるとか、歌舞伎、浄瑠璃の脚本であるとか、読本、俳諧書であるとか、江戸時代の庶民文学であったろうことは貸本屋という業種から容易に推察できるのであるが。

その大惣本の大きな集団（3,673部、13,094冊）が京都大学附属図書館に納本されたのは、館が創設された年、明治32年（正式の登録・受入れはおくれて3年後の明治35年）のことである。京都大学には一般の蔵書と区別される、ある特定の主題のもとに集められたコレクションは数多くあるが、この大惣本こそ、特殊コレクション第一号といえよう。

筆者は明治32年当時のわが国において、こうした大惣本の購入はどのような意味をもっていたのか、また、コレクションとしてどのように評価す

べきであるか、という観点から出発する。そして売却にいたる経過（明治30年～32年）についてだけでもさまざまな異説がなされてきた事実を各種の文献によって例示していく。この間、坪内逍遙、水谷不倒、井上哲次郎、上田万年、吉川弘文館（吉川半七、林縫之助）、大野屋（武田伝右衛門）などが介在し、幾筋もの買却交渉のルートがあって、複雑な様相を呈する。結局、大惣本の中心的部分は東京（帝国）大学、京都（帝国）大学、東京高等師範学校および上野の帝国図書館の四図書館に分割して納本されたことが跡づけられていく。

筆者は次に京大の附属図書館に保存されている図書原簿により納本の業者、その日時、価格などを確定し、さらに例えば柴田光彦氏「大惣蔵書目録と研究」などの援用によって、上野の帝国図書館、東京高等師範学校などに納本された大惣本の内容を照合していく。こうして筆者の論文の眼目の一つである、「選定にたずさわった井上、上田両博士は先ず東京大学のため良書を抜き出した」とか、「したがって他の三図書館に納本されたものはあまり価値のない雑多なものが多かった」となどという俗論が全く根拠のないものであったとして退け、両博士の選別は極めて公平であり、高度の専門的配慮をもっておこなわれたはずであるとの結論をひき出している。文献の博搜と現場での実証が美事に合致した成果であるといえる。

#### 東京大学文献 情報センター タスク・フォース業務報告

附属図書館 木 村 祥 子

東京大学文献情報センターへタスク・フォースとして出向中の木村祥子さん（附属図書館参考調査掛）から、その日常業務を伝えるリポートが寄せられ

てきているので、その主要な部分を紹介させていただく。なお、タスク・フォースとしての今年度の主要課題は「学術雑誌総合目録」（学総目）欧文編の